

## 生徒とともに

### 曾祖父母・祖父母の中国残留体験をたどり

### いのちを受け継ぐ歴史学習

---

- 1 研究のねらい
- 2 勤労奉仕隊員であったAさんとの出会い
- 3 青少年義勇軍の隊員であったBさん
- 4 Cさんと高社郷の運命、そして強行帰国
- 5 家族を捨てて逃げたと思われていたDさん
- 6 名簿のどこに名前があるのか Eさんの体験
- 7 今年の授業から
- 8 曾祖父は軍人ではなかった
- 9 Fさんの体験
- 10 残された課題

## 1 研究のねらい

長野県満州開拓自興会が編纂した労作「長野県満州開拓史」がある。かつての「満蒙開拓団」について、先人が編纂した膨大な記録である。

その「名簿編」には、開拓団、勤労奉仕隊、青少年義勇軍など、3万3千人の名前が刻まれている。

今年、長野県立歴史館がそれをデータベース化して、企画展「長野県の満州移民」に展示した。私はそれを高く評価する一方で、「遅きに失した」と、非礼を承知で辛口の評価をした。

すでに戦後67年。この名簿編に記録された方々は、ある人は間違っていたり、ある人は名前がなかったりしている。それを修正できる人もいるが、修正できない人もいる。そのことが、「遅きに失した」と私をして言わしめた理由である。

しかし、そうではあっても、この作業の持つ価値が限りなく高いことに変わりはない。それをもとに、県下各地の教育現場でも新たな取り組みが始められれば、素晴らしいことである。私はそのことを心から期待したい。

2002年に始まった私の実践は、生徒とともに、中国「残留」体験者であるその曾祖父母、祖父母をはじめとする家族への聞き取り、「名簿編」との照合の積み重ねであった。そして、生徒はもちろん、その家族ですら知らない体験者の記録を、「名簿編」をもとに掘り起こしてもきた。

どのように掘り起こしてきたか、以下に辿ってみたい。

## 2 勤労奉仕隊員であったAさんとの出会い

Gの曾祖母Aさんは、勤労奉仕隊の一員として、高等科を卒業した14歳の春、「彼女ひとりでは心配だ」という姉とともに渡満し、逃避行の途中で中国人楊さんに助けられ、中国に「残留」した。

「W村の出身で開拓団に行ったらしいよ」とGが言った。

「ひとりでは心配だって言って、お姉さんも一緒に行ったんだって」。

「それではK郷かな」。私は名簿編のページを手繰ったが、名前はなかった。お姉さんという人の名前もなかった。

「もしかしたら、それは開拓団ではなくて、奉仕隊で行ったんじゃないか？」

Aさん宅を訪問し、GとともにAさんからお話を聞いた。案の定、AさんはK郷の奉仕隊として、14歳になったばかりの昭和20年春渡満し、その夏、ソ連参戦とともに、逃避行をし、中国人楊さんに助けられた。楊さんがいなかったら彼女は、一緒に逃げていた二人とともに、取り囲んだ中国人たちに殺されていたであろう。

中国人に撲殺されたという事実は、埴科郷の人々の記録からもうかがい知ることができる。埴科郷は、高社郷、更級郷、阿智郷などと一緒に集結した佐渡開拓団跡での

ソ連軍の一斉攻撃を前に、「最後まで望みを捨ててはいけない」と団員を励まし続けてきた池田健太郎団長が、ついに苦渋の解散命令を出した。

「力のある人は勇気を揮って生き延びてください。どんな場合でも軽率に自ら命を捨てることのなきように」という団長の命を受けてそこを後にした人々のほとんどが、その後亡くなっている。「名簿編」に並んでいる文字は「撲殺」。近隣の中国人部落で襲われたことが、そこから推測できる。

池田団長自らは、ソ連軍に立ち向かい、最後は軍刀を腹に当て、自決している。その遺骸を7か月後に、現地に残留した女性の案内で、中国人に変装して訪ねた千曲市森出身の笠井正夫さんと長野市塩崎出身の風間源之助さんが発見している。90歳を過ぎた笠井さんはきっぱりと、「佐渡開拓団跡で亡くなった人は1141名。その人たちみんなの供養をしています」とおっしゃる。現地で中国人に骨箱を作ってもらい、池田団長の遺骨を一つの箱に、あとの3つの箱には、それぞれの開拓団から遺骨を拾い、中国人の家に泊めてもらいながら、日本に持ち帰ってきている。

Aさんは楊さんの息子さんと結婚し、8人の子の母として、中国の大地に生きてきたが、姉や、一緒に奉仕隊で行った人々も共々、「名簿編」には掲載されていない。

今、ひ孫まで入れて70人以上となったAさんの一族は皆、学区の団地に居住している。そして、Gの社会科新聞は、S中で中国残留日本人としての曾祖母の歴史を初めて新聞にした、画期的なものとなった。そしてGのまたいところに当たるHは2年後、Gに引き続いて曾祖母の歴史を新聞にし、更に、曾祖母Aさんの長女として中国で生まれ育った祖母の歴史も新聞にした。2枚の新聞を作ったのである。

### 3 青少年義勇軍の隊員であったBさん

Gの同級生Iも、「うちのおじいちゃんも満州に行ったよ」と伝えてきた。「どこの開拓団かわからないけど、14歳で行ったって言うてるよ」。「それは、開拓団ではなくて、満蒙開拓青少年義勇軍ではないか？」

「名簿編」の「義勇軍」の項を手繰っていくと、祖父Bさんの旧姓で似た名前の人が載っていた。名前の字が違っていたが、多分この人だろうと判断した。

中間テストの前日、会議に出張した後、お宅にお電話すると、「先生、電話じゃだめだから、今から来たい」と言われた。もう8時になろうとしていた。

家庭訪問をし、ご本人に直接お聞きし、「名簿編」を見ていただいて確認した。

「テストよりこっちの方が大事だぞ」と、すでにパジャマに着替えていたI、Jのきょうだいも同席。二人は「名簿編」に載っている祖父とその同期生たちの名前に圧倒された。

Iが夏休みの社会科新聞に祖父のことを取り上げ、完成して1週間後、Bさんは自宅の突然の火事で、煙に巻かれて亡くなってしまった。

訃報に接し、「記録させて良かった」と思った。Bさんのお棺の中に、聞き取りをし

た時の孫たちとの写真と、Iの新聞のコピーを入れていただいた。

#### 4 Cさんと高社郷の運命、そして強行帰国

G、Iの取り組みの翌年、Kを誘って、曾祖母Cさん宅を訪ねた。

Cさんは、高社郷の一員として渡満し、現地で下田連治郎さんと結婚。連治郎さんが根こそぎ動員された直後、ソ連軍が侵攻してきた。高社郷は佐渡開拓団跡で集団自決したが、その前に脱出し、逃避行の末、中国人の炭鉱労働者たちに助けられた。

高社郷の集団自決の決定内容は、「父親のいる家は父親が家族を『処置』し、最後に自決。父親のいない家は、幹部が『処置』するということであった。そして、見届け役には、団長不在により団長代理を務めていた副団長のF氏と、皮肉にも、ただ一人自決反対を主張した下田讃治さんになった。讃治さんは連治郎さんの父親である。

Cさんは、連治郎さんの弟音五郎さんら数人が佐渡開拓団跡を脱出したことを知り、父親に「おれも逃げてえ」と言った。父親は「おめえは嫁にくれた者で、もううちの人間ではねえから、好きなようにしろ」と、その申し出を受け入れてくれた。

連治郎さんと音五郎さんは「名簿編」に名前が記されているが、なぜか二人ともそれぞれが、讃治さん一家とは別に記されている。一方、連治郎さんの妻となったCさんの名は、Cさんの実家のところにも、どこにもない。

Cさんは、1993年9月5日、他の中国残留婦人とともに12人で成田空港に降り立った。「私たちが日本で死なせて」と細川首相に直訴するつもりで来日したところ、当日は日曜日で首相官邸に出向くことができず、成田空港で夜を明かすことになった。そのため、報道各社がこのことを大々的に取り扱うことになって、ついにその年の暮れ厚生省は、それまで日本の親族が身元を引き受けなければ帰国できなかった残留婦人たちに対して、親族の同意のあるなしにかかわらず希望者には国が帰国旅費を持ち、永住帰国できるという方針を打ち出した。

日中国交正常化から20年以上も経て、この12人の女性たちが、まだなお大勢いた中国残留日本人たちの帰国に道を開く重大なきっかけを作ったのである。

(2012年10月1日TBS系列で、Cさんたちをモデルにドラマ「強行帰国」が放映された。)

#### 5 家族を捨てて逃げたと思われていたDさん

「うちのひいじいちゃんは、家族を捨てて逃げちゃったんだって」とLが言った。

「まさか、そんなことはないと思うよ」と私は言った。だが、もちろん確証はない。

「中野の方の出身らしいよ」。

「高社郷の出身か」と名簿を探してみたが、名前はなかった。「それでは、全県から募集された開拓団か」と、「名簿編」のページを手繰った。そして黒台信濃村の名簿の中に、Lの祖母の一家の名前を見つけた。曾祖父の死因が記されていた。

死因は「銃殺」であった。

戦後 65 年もずっと、「家族を捨てて行った」と思われていた L の曾祖父の名誉を回復してやることができた、私は思った。

ハルビンの収容所でやせ細り、そのままでは死んでしまうと思われるほどだった L の祖母は、中国人に引き取られ、助かった。その息子さんが、L の祖父である。家庭訪問をし、お話を伺いながら、酸素吸入を続けている L の祖母を、やさしく介護する祖父の姿を見た。私は、仏の姿を見ているようで、思わず頭を垂れていた。

二人とも日本語を話すことはできない。「『日本語もできない人間が、何で日本に帰ってきたんだ』と言われたそうです。」と、中国人である L の母親は言った。

私はやり切れない思いに駆られた。日本人のひとりとして、どうしようもない恥ずかしさと憤りがあった。

## 6 名簿のどこに名前があるのか E さんの体験

M に「じいちゃんの歴史をしっかりと記録しておけよ」と、助言した。大会を目前に、部活動に忙しい M を援助し、祖父に尋ねる内容を確認しながら、聞き取りを進めさせた。

祖父の E さんは、中国残留孤児長野訴訟の原告の一人である。訴状の中から E さんのものと思われる内容を確認した。

中国人に助けられた赤子は推定 2 歳ぐらいで、日本人の開拓農民の子どもであることは確かだったが、親がだれなのかわからなかった。逃避行の中で衰弱し、そのままでは死んでしまうと言われた。しかし最初に助けてくれた中国人はお金もなく、とても医者に診せることはできず、その子を引き取れることをあきらめた。あとを受けてその赤子を引き取ったのが N さんだった。貧乏な農民であったが、お金を工面して医者に見てもらったおかげで、赤子は命を取り留めた。そして E と名づけられ、N さんのもとで実の子同様にかわいがられ、育てられた。E さんは学校で「小日本鬼子」と虐められても、養父母を悲しませてはならないと、じっと我慢し、勉学に励んだ。

日本人だと言われれば、「自分がどこのだれなのか」と考えるのは、当然のことである。しかし、大恩のある養父母を差し置いて、肉親捜しをすることはできなかった。日中の国交が正常化し、養父母が亡くなってから、E さんは肉親捜しに来日した。しかし肉親を捜しあてることはできないまま、その後、妻と 4 人の子、その家族とともに帰国し、学区の団地に居住している。中国では「日本人」と言われ、日本に来たら、日本語ができないので「中国人」と言われると、E さんは述懐しておられた。どんなにか悔しい思いをされたことだろうか。E さんは、育ててくれた N さんのご恩を忘れず、N の名字のまま、中国語しか話すことができない日本人として生きている。

M は書いている。「じいちゃんが言うには、「たくさんの方の助けがあって、今の自分がいる」と言っていました。だから、人の恩を忘れちゃいけないと言っていました。人間は一人じゃ生きられない。だれかと助け合っていかなさ

やダメだなあと考えたし、命を大事にしていきたいなと思いました。ずっとこの事を忘れないでいきたいなと思いました。」

Eさんは、どこのだれなのか。少なくとも開拓団員の子どもであるということはわかっていて、この「名簿編」に、本名で記されているはずである。だが、ご本人にも、私たちにも、Eさんの名がどこに記載されているのかわからない。

同じことは、Oの祖母についても言える。Oは社会科新聞の最後にこう書いてきた。

「しかし（おばあちゃんは）帰国しても良いことばかりではなく「祖国の言葉が通じない」と悲しくなったそうです。この話しをおばあちゃんから聞いた時、初めて知ったことがたくさんあり、びっくりしました。そして、同時におばあちゃんはとても過酷な人生を歩んできたことも分かりました。これからはもっと、おばあちゃんを大切にしていきたいです。」

## 7 今年の授業から

今年の担当学級には、下田音五郎さんの孫のRがいた。多文化共生支援員として来ていただいていたCさんの孫のSさんに同席してもらって、「君は満州に行くか」「満州にいた人々はどうなったか」の二つの授業を行った。

音五郎さんは昨年11月、80歳の生涯を閉じた。10月に私が北信濃の病院に見舞いに行くと、酸素マスクを外して「おれはまだ大丈夫だ。先生、また来てくれや」と気丈に話されたが、それからちょうど一か月後他界された。私は聞き取ってきた音五郎さんの生涯を冊子にして、一族の皆さんにお配りした。

授業では、①下田音五郎さん一家がどのような経緯で開拓団に参加したのか、②現地でどのような生活をしていたのか、③逃避行の途中でどんなことがあったのか、④中国に残留し、どんな生活を送ってきたのかの4点に絞って、体験を紹介する形を取った。

学年全体でも特設授業を行い、こちらは音五郎さんとCさんの人生を軸に進めた。そして、Cさんの長男であるSさんの父親が中国と日本でどのような体験をして生きてきたのかを、Sさんの口から語っていただいた。

Rは社会科新聞「祖父下田音五郎の中国残留体験」の最後に次のような感想を書いている。「僕は後悔しています。祖父が活着ている時に満州にこんな残酷な事が起きていたことを知らず、祖父とそういう会話ができなかったからです。祖父は、今の自分と同じ位の歳で「逃げたい」と言いました。もし自分が同じ立場だったら正直そんな判断はできなかったと思います。祖父は本当に、人として立派な人だと思います。僕はこれから、祖父のような人になりたいと思います。それと、戦争によって受けた傷を次の世代にどんどん語り継いでいきたいと思います。」

## 8 曾祖父は軍人ではなかった

Tのクラスは、3年間一度も授業を持つことができなかったが、Tの母親も本人も、「外国籍生徒の地区懇談会」や「餃子を食べる会」などに積極的に参加してくれており、日常的に会話をしていた。1年の時、「私たちは東寧の出身で、ひいおじいちゃんは軍人でした」と母親が語った。

ソ連との国境の町・東寧には関東軍の要塞があったので、私もその言葉を鵜呑みにし、時が過ぎていた。つまり、Tの家族は、開拓団関係ではなく、今までと違うケースであるという認識であった。

3年になって、「T、ひいおばあちゃんの歴史をしっかりとまとめよう」と助言。「おじいちゃんが手紙や資料をたくさん持っているよ」と言うので、夏休みに入って、一緒に聞き取りをすることにした。

8月のある晩、家庭訪問をし、中国人の祖父からたくさんの資料を見せていただいた。Tの曾祖母は中国で亡くなっており、一族が日本に「帰国」するためには、日本人である曾祖母とのつながりを証明するものが必要であった。

その中に、戸籍謄本もあった。Tの曾祖母は飯山出身のUさんと結婚し、二人の間に3人の娘があった。その記録を見ていくと、三女が「中和鎮信濃村で出生」とあった。

「T、ひいおじいちゃんは軍人ではないぞ。開拓団員だぞ。今から学校へ行こう。」

(本人)	明 37・1・10 (41)	戦死	昭 20・3・17	硫黄島
(妻)	大 4・6・14 (30)	帰還		引揚げ
(長女)	昭 7・6・26 (13)	帰還		引揚げ
(二女)	昭 14・9・15 (5)	帰還		引揚げ
(三女)	昭 17・6・7 (3)	帰還		引揚げ

夜の9時過ぎ、Tと母親を連れて、3人で学校へ行き、研究室の自席に置いてある「名簿編」を手繰った。中和鎮信濃村の項に、その名前はあった。

Tの曾祖母の一家は、初期に全県から募集された開拓団である第7次中和鎮信濃村開拓団の一員として、夫のUさんが昭和14年3月14日に35歳で入植。妻である曾祖母は同じく14年11月23日、24歳で、当時7歳の長女と生後2か月の乳呑児を連れて入植している。現地で三女が生まれ、まだ2歳の時にUさんは根こそぎ召集され、硫黄島で、41歳で戦死している。曾祖母は29歳で3人の娘をかかえて未亡人となったのである。

8月9日のソ連参戦により、中和鎮信濃村の人々は方正に避難。しかし一部の人々は山の方に逃げ、集団自決をした。

Tの曾祖母は本隊とともに方正に避難し、収容所に入るが、零下30度の寒さと飢えで次々と死者が出た。1万5千人の避難民に対し、死者は5千人を超えた。

土が凍り、穴を掘ることができなくなって、死体はそのまま野積みにされた。

「このままでは死んでしまう」と、鉄道のあった珠河（現在の尚志）を目指して脱出した人たちもいたが、その多くは途中で凍え死んでいる。中和鎮の人々の中には、再びもとの開拓村に戻って命を長らえた人もいる。

曾祖母は、東寧から出稼ぎに来ていた中国人宋さんに助けられ、二女を連れて、二人の息子を抱える宋さんの後妻となった。長女と三女は中国人にもらわれていった。

帰国を果たせぬまま二女、続いて曾祖母ご本人も亡くなり、二女一家と、宋さんとの間に生まれた3人の娘さんたち一家が日本に帰国してきている。

宋さんとの間の2番目の娘がTの祖母である。よれよれの紙になった戸籍や手紙が、一家が日本とつながる貴重な証明になっている。その中には、故郷・飯山の弟さんから曾祖母に宛てた手紙、曾祖母から弟さんに宛てた手紙、さらに、長女から曾祖母に宛てたカタカナだけの手紙もある。戸籍には、三女は「戦時死亡宣告」とある。

「名簿編」に戻ると、Uさん一家で帰還できたのは、二女だけで、「名簿編」編纂の時点では、4人が生きて「残留」ということになる。

多くの女性たちと同様、夫が兵隊に取られ、さらに29歳で未亡人になり、幼い3人の娘をかかえてTの曾祖母はどのように農作業をしていたのだろうか。

1972年の日中国交正常化後の1975年に、曾祖母が郷里の弟に宛てた手紙には「今は何も不自由はない」と書かれている。

身体が不自由になって、夢にまで見た帰国を果たせず亡くなった曾祖母の胸中はいかばかりであっただろうか。

Tは新聞に曾祖父・宋景坤さんの写真を載せ、「私たちみんなの命の恩人です」と書いた。最後の「感想」に次のように書いている。

「この新聞を通して、曾祖母たちのことや戦争のことがわかりました。そして今、自分たちがここにいるのは、曾祖父たちのおかげだと思います。」

## 9 Fさんの体験

祖母が残留婦人であったYは、その歴史に正面から向き合おうとはしていなかった。夏休みの社会科新聞のテーマにもするようにと話しながら、私自身も手が回り切れなかった。RとTのふたりで精いっぱいだった。当然Yは新聞を作らず、文化祭を迎えてしまった。その間、尖閣諸島をめぐる日中の関係が険悪化した。社会科の授業の冒頭にいつも生徒とともに考え合う「今日のニュース」は、原発問題、オスプレイ配備、民主・自民の代表選、尖閣・竹島問題・・・と、大きな問題ばかりであった。

毎時間授業後に書かせている学習カードにYは、「おかんが、物騒だから戸



締りをよくしておきなさい、外では中国語をしゃべっちゃいけないと言ったよ」と書いてきた。

この問題が、今後の西中にどのような影を落とすか、私たちは注意深く子どもたちに関わって行かなくてはならないと、身を引き締めた。実際、2年生のクラスでは「中国人、くそ！」などと騒ぐ生徒もいた。焦ってもだめである。

文化祭を迎えて、初めてYは「おかんが、明後日おばあちゃんちへ行くって。先生も一緒に行くか？」と言ってきた。新聞は文化祭に無理に間に合わせなくても良い。そして、文化祭後の振り替え休日に、Yの母親とともに3人で、S町に祖母Fさん夫妻（祖父は中国人）を訪ねた。

Fさんは李花開拓団小県郷の出身だった。李花開拓団は黒竜江省延寿県にあった。ソ連参戦後のFさんの動いた足取りはそのまま、2002年の訪中調査の時に私がたどってきた道のりであった。地名も場所もすべて、懐かしい風景とともに私の脳裏に蘇った。

Fさん一家の名前は「名簿編」に載っていたが、ここでも、弟・妹の名前はなかった。二人は方正の収容所に入ってすぐ、はしかで亡くなっている。

「あっという間に子どもたちはみんな死んじゃいました」とFさんは語った。

Fさんは1931年生まれ、敗戦時14歳。父親は45年7月、根こそぎ動員された。残された開拓団の人々はソ連参戦により8月末、近くの中和鎮へいったん避難。そこから方正に移動し、関東軍の宿舎であった収容所に入る。まだ避難民の中では最初の方であった。後に続々と奥地から避難してきた人々でごった返し、1万5千人が集結した。

避難してすぐ、弟妹たち幼い子どもが伝染病で亡くなった。まだ穴を掘って埋葬できたが、続々と死者が出て、大人たちが「子どもの次は年寄りが亡くなる。今のうちに穴を掘っておこう」と相談しているのをFさんは聞いている。9月に入れば霜が降りる現地で、いずれ穴が掘れなくなるのを予想し、まだ掘れるうちに掘っておこうということだった。

年を越して、このままでは死んでしまうと判断した人々の中で、近くの開拓団から避難してきた人は、中和鎮など元の開拓団に戻る動きもあった。

Fさんたちは3家族で延寿県の方に脱出した。馬車に乗り、つかまるところもないFさんは、後ろの小さな台に乗り、鉄の輪につかまって行った。降りるときには手が凍り付いて、輪から離れず、皮膚がべろりと剥けてしまった。

その後延寿で、趙さん一家のお世話になったFさん母子であったが、46年の春に母親が、続いて妹も亡くなり、Fさんは一人ぼっちになった。

そして趙さんの息子と結婚し、貧しさの中で子どもたちを育ててきた。戦後何年かして、シベリアから復員し、他家に婿養子に入った父親と連絡が取れて、何回か文通してきたが、文化大革命でそれもできなくなった。何人かいた日本人の家を訪問することもできなかった。

1972年の日中国交正常化は待ちに待った瞬間だった。しかし、その後もFさんが帰国するには難題が山積していた。身元引受人の問題だった。

1989年、戸倉上山田温泉のホテルの社長が引き受けてくれた。その社員寮

に住み込みということで帰国。夫と子どもたち一家を呼び寄せるのには5年の歳月を要している。結核を病んだ身で、58歳から12年間ホテルの従業員として働き、今、中国人の夫とともに穏やかな老後の生活を営んでおられる。

Yは祖母の歴史を初めて聞いた。そして遅ればせながら、これから新聞づくりに取り掛かる。時間がかかっても、そのことによってYが自分のルーツと本気で向き合い、将来に向かって歩み出せば良い。

## 10 残された課題

「名簿編」を足掛かりに、中学生たちの曾祖父母、祖父母の人生を辿りながら、それを授業に生かしてきた。その過程は、生徒の命のルーツを明らかにし、それぞれの人生を大事に生きて行けよと激励をする日々であった。

一方、「名簿編」に載っていない方々の消息も明らかにした。また、「名簿編」によって家族の名誉を明らかにもしてきた。

この実践は毎年、まさに薄紙を剥ぐように継続してきたものである。目の前にいる生徒ひとりひとりに、具体的に迫り、ともに調べ、授業化していくことの繰り返しであった。「日本語指導教室」がある本校には毎年、中国に由来する子どもたちが入学してくる。そして彼らは自分のルーツとその歴史的背景をほとんど知らない。これをきちんと教えることは、私たちS中の教師として、絶対に避けては通れない実践課題である。

家族の歴史を知らしめることは、自分の命を大切にさせることに通ずる。それほどまでに、それぞれの方々がたどった道筋は重いものがある。この実践を通じて、直接の孫・ひ孫だけでなく、すべての級友がその体験を共有し、真の国際交流、平和と国際連帯の主体者として育ててくれることを願って止まない。そして、それを支援するのが私たちの使命である。

積み重ねてきた日中交流の実践が、この秋、一部政治家の跳ね上がった行動をきっかけに、根底から崩されかねない危機感を覚えた。

日本国内にも強硬な世論が醸成されつつあり、これを「好機」として平和憲法を一気に改定しようという動きもある。

目の前の中学生たちも、そうした社会の動きの中で、知らないうちに強硬な雰囲気形成させられている。一方で、中国とつながる当事者の子どもたちはYのように、もっと敏感に感じている。

今、S中は重大な岐路に直面している。

私たちは、両方の血を受け継ぐ彼らを徹底して守っていかなければならない。歴史を学び、目の前の子どもたちの命を守る。これが私たちに課せられた重大な責務である。そのことを肝に銘じながら今後も、常に生徒ひとりひとりに寄り添い、実践を継続していきたい。